

『無銭横町』

著者
西村賢太
文藝春秋 / 13000円

にしむら・けんた / 07年『暗渠の宿』で野間文芸新人賞、11年『苦役列車』で芥川賞受賞。著書に『ザの歌』他

繊細な文学趣味と

ガテン系生活の融合。

「賢太節」が心地よい

円熟の短編集

評者
阿部公彦
東京大学准教授

「いったい、どうしてこうなるの？」この主人公を見ていると思わず眩きたくなる。中卒。定職なし。収入は日傭い港湾労働。短気。酒癖悪し。身体頑健。性欲旺盛。風俗マニア。ここまでは、まあ、わかる。ところがなぜかこの人、田中英光や藤澤清造など大正から昭和の私小説作家にこれあげている。食費に困り、鍋もない貧乏下宿で、五十五円のインスタントラーメンを水で揉みほぐして食べて気持ち悪くなったりするくせに、田中の自筆書簡がどうしても欲しくて代金三十八万円を

月賦で支払中という。恐ろしく古風で繊細な文学趣味と、ガテン系ライフスタイルの取り合わせが謎なのだ。

この変な若者がおよそ二〇年をへて作家デビューを果たす。二〇一年には芥川賞受賞。受賞の知らせに「そろそろ風俗行くつもりでした……」と挨拶したのは記憶に新しい。今や西村賢太の名は私小説作家として一流ブランドだ。「無銭横町」に収録され



ているのは、西村賢太……いや、「北町貫多」の作家デビュー前後を描いた作品だ。どれも読み始めると、とにかくやめられない。涼しい「名文」気取りとは無縁で、文章は一字一句を執念深く刻みこんだ呪文のよう。それが読者の首根っこを捕む。大正作家オタクだけ

ありベースは爺臭い擬古文風。古本屋との交渉などまるでゴシック小説のような邪悪な空気が漂う。でも読み心地は軽快だ。ギャグも洗練され、罵詈

雑言も秀逸、啞然とする描写(主人公の寝床がすごい……)もたつぷり。何というブレンドか。まさに賢太節。特許をあげたくなる。

西村賢太と言えばちやぶ台ひっくり返しの展開が定番だが、今や彼も円熟の境地。お馴染みの「秋恵もの」も、暴行シーンより波乱含みの会話で盛り上げる。特筆すべきは伝説の実父の登場だ。後に性犯罪で逮捕される父が、「サンキュー、ミスター」などとへらへら笑いながら、子供のためにヤクルトのロジャーからサインをもらっているのではないか。いつもながら盛りだくさんの一冊だ。

あべ・まさひこ / 英文学者。13年『文学を(凝視する)』でサントリー学芸賞受賞。「英語的思考を読む」他